

HIRATAHONGŌ

松本市 平田本郷遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1995.3

長野県松本市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成6年5月10日から同月24日にかけて実施された松本市芳川平田に所在する平田本郷遺跡の第2次緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は公園緑化事業の実施に先立ち、松本市より委託を受けた松本市教育文化振興財団が調査を行なった。
3. 発掘調査は、今村 克、市川 温が担当した。
4. 本書の執筆は、高桑俊雄の他に関沢 聡、竹内靖長、三村竜一が行なった。
5. 報告書作成にあたっての作業分担は次の通りである。
土器実測・トレース：竹原久子、松尾明恵
遺構図トレース：村山牧枝
6. 編集に際しては、滝沢智恵子の助力を得た。
7. 本書では、第1次調査の報告書で掲載できなかった石器の一部についても併せて報告することとした。
8. 石器の実測図中の矢印は、砥石・敲石：使用痕（実線） 敲き痕（破線）、打製石器：使用による磨滅痕を表している。
9. 本調査に関する遺物・図面類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査地と周辺遺跡	2
3. 遺構と遺物	
(1) 遺 構	4
(2) 遺 物	4
4. ま と め	6

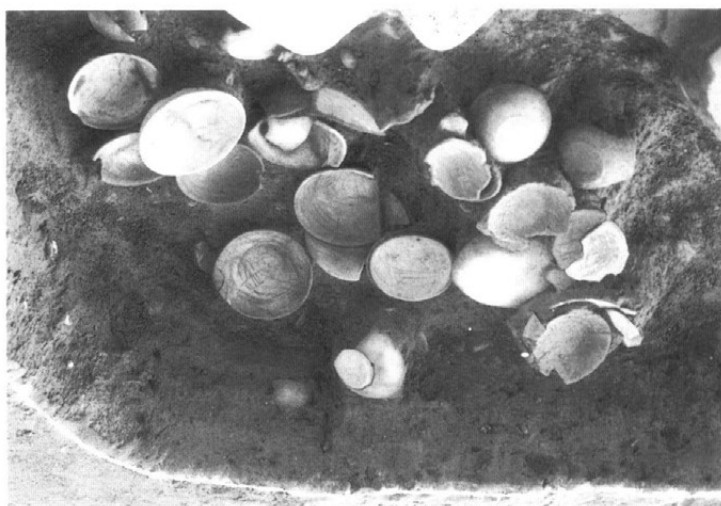
1. 調査に至る経緯

松本市芳川平田地区は過去に大規模な発掘調査が行なわれておらず、遺跡の実態が明確ではなかった。こうしたなか、平田本郷遺跡を含む野溝平田地区に県営緑農住区開発関連基盤整備事業が計画された。平成4年度には県営ほ場整備事業に先立って発掘調査が行なわれ、竪穴住居址94軒、掘立柱建物址6棟など奈良・平安時代にかけての大集落が見つかっている。平成6年には、調査地に隣接して多目的運動施設を併せ持つ公園緑地事業が実施されることになり、事業地が遺跡の範囲内であることが予想された。そこで事業担当課の流通団地関連本部と保護協議を重ねた結果、発掘調査を実施して記録保存を行なうこととした。

発掘調査の業務委託契約は、松本市と助松本市教育文化振興財団との間で平成6年4月7日に締結し、松本市立考古博物館が発掘調査を担当することになった。

第1次調査(1993)のようす

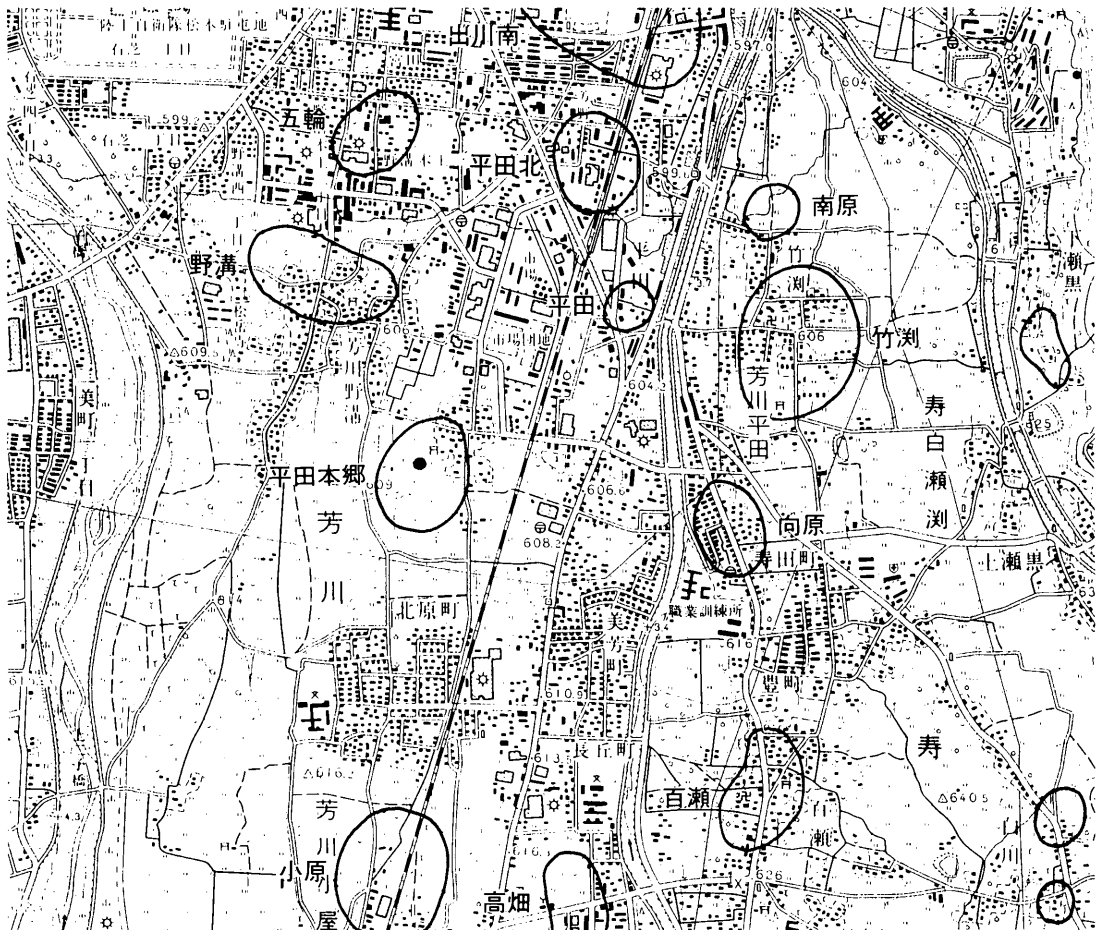
	A地区北半部
第13号土坑	第13号住居址



2. 調査地と周辺遺跡

本遺跡は松本市芳川平田にあり、地形上は西方に北流する奈良井川の氾濫原に属する。今回の2次調査地点は、位置的には1次調査A地区の北・D地区の東にあたる。

周辺には本遺跡の北に、出川西・出川南・平田北・平田・野溝の各遺跡がある。田川左岸の出川西遺跡では弥生時代～平安時代前半に亘る住居址等の遺構を確認し、平安時代の住居址からは土錘20個余りが出土しており注目される。出川南遺跡では古墳時代後期の大集落を確認した。平田北遺跡では古墳時代中期～中世の遺構が確認されている。東には田川右岸に竹瀝・向原・百瀝の3遺跡がある。百瀝遺跡は弥生時代の遺跡として著名であるが、平安時代の集落の存在も確認されている。南に目を転じると、高畑・小原の2遺跡がある。高畑遺跡では古墳時代末期から平安時代の住居址3軒が確認されている。小原遺跡は奈良・平安時代の大集落で、殊に平安時代後期の住居址から鉄鈴・鉄鐸等の祭祀に関わる遺物が得られ注目される。以上のように古代を中心に概略を述べてきたが、本遺跡の南方一帯は『良田郷』の中心地をなしていた地域と考えられ、また近くに東山道覚志駅の存在が想定されており、周辺の今後の調査に期待したい。(三村)



周辺遺跡



遺構配置図

3. 遺構と遺物

(1)遺 構

住 居 址

2軒が調査できた。第95号住居址はAトレンチの東隅に検出した。ここは用地南東隅に当たる。南半部のみの調査であり、規模は東西3.0m、プランは胴張りないし不整の方形を呈するようである。東西の断面で見ると、掘込面から60cmで床面となる。床面は黄灰褐色土で東側が少し高くなり、中央部に堅さも残る。覆土は小・中礫が混入しており、中層から床面上に至ると砂礫が多量に混じってくる。遺物は土師器が少量のみで器形・時期を判ずるに適当なものはない。又、焼土、ピット等は見当たらない。

第96号住居址はDトレンチにその北半部を検出し、急遽回りを掘り全容を調査した。周囲の検出面は鉄分が多量に沈澱した砂質黄灰褐色土で覆土は明瞭にわかる。プランは東西の壁長が異なる台形様を呈し、規模は東西5.05m、南北は東側5.40m、西側4.0mを測る。床面は鉄分が沈澱した黄褐色土で、壁際を除き全体的に堅さがある。四方の壁は小・中礫混入灰褐色土となり、傾斜は緩やかな状態で、特に南壁はなだらかである。カマドは東壁北隅にあり、壁を外へ突出させ石組カマドを設けている。内部には焼土が全く見られず、炭化物（材）片が燃焼室中央部と住居址北東隅を中心に広く散在する。遺物は量少なく、土器と鉄器がある。土器は完形の土師器皿3点の他、灰釉陶器の椀等、又、鉄器に完形の苧引鉄を含め3種6点があり、これら図示し得たほとんどが覆土下層～床面上から得られたものであり、平安時代後期に含まれる。

土坑・ピット

土坑は5基、ピットは3基が検出されている。Aトレンチにおいては第44～46号土坑とP329～331を検出した。このうち土坑は全てトレンチの断面に現れており、深いトレンチの為、床面まで具に確認できた。44号は土師器1片のみの出土であるが、壁の状態より見て住居址の可能性が高い。45号は浅い落ち込みの中にピットを設けていることが観察できる。3基のピットはいずれもトレンチの掘込み下部で検出されており、前3基の土坑より深い掘込みであることがわかる。47・48号土坑は96住の北側にある。47号土坑の床面には被熱したきれいな焼土面が認められ、鉄滓等の遺物はないが小鍛冶のような施設とも考えられる。

(2)遺 物

土 器・陶 器

今回の調査では、住居址・土坑から17点出土した。これらのうち、図化できたのは第96号住居址から出土した10点のみである。以下、各器種の特徴を記述する。

1～3は、灰釉陶器碗である。ロクロ調整で、底部回転糸切りナデ調整されている。釉は、漬け掛け施釉されている。丸石2号窯式に比定される。4・6～8は、土師器杯である。4は口径15.6cm、器高7.0cm、6～8は口径9.2～9.7cm、器高3.9～5.0cmで大小2法量みられる。6・7の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。10は、土師器小形甕である。胴部外面・口縁内面には、カキ目調整がなされている。9は、須恵器長頸壺である。器形は該期の黒色土器に一般的にみられる器形であるが、黒色処理されておらず須恵質を呈する。頸部から肩部にかけて、3条の沈線が巡る。5は須恵器杯Aであるが、混入品と考える。本址土器群の時期は、中央自動車道長野線の松本平の編年13期（11世紀中葉）と考えられる。（竹内）

石 器

今回の調査では石器は出土していないが、1次調査の未報告分の石器（4種15点）を掲載する。

砥石（1～9） 主砥面を上にとすると、幅より厚みの値の大きな1・2がある。1はごく使用初期段階のもので砥痕も見えている。3・4・6・7は断面でみても使用の激しい事を示し、7に至っては下部が破損した後も使用を続け、小型化が進んでいる。このうち4・7は緻密な石質の凝灰質岩で仕上げ砥用に適している。5は自然礫を素材とし、打ち欠いた平坦な裏面を使用せず、湾曲した表面に砥痕を残している。

敲き石（8・10） 砥痕をも残す8と、周囲まできれいに磨滅した10がある。

愛玩石（11・12） 痕跡は見当たらないが、現場作業中に出土する多量の石の中では異なる様子のもので、遺物として扱った。

打製石器（13～15） いずれも片端側を破損している。13は打製石斧で片側縁が使用により磨耗している。15も磨耗が観察されるが、横刃型石器と推定される。

石 器 一 覧 表

No	器 種	出土地点	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	観 察 状 況 等
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
1	砥 石	44 住 No. 41	22.6	10.3	11.7	4200	砂 岩	砥面らしき平滑面 1
2	〃	A 区検出面	19.0	7.7	9.8	2400	砂 岩	砥面 3
3	〃	81 住 No. 13	10.7	9.5	5.5	845	砂 岩	砥面 4、被熱
4	〃	10 住 No. 31	16.5	9.1	6.8	1321	凝 灰 質 岩	上下端以外砥面
5	〃	29 住 No. 16	18.6	6.1	2.4	495	硬 砂 岩	砥面 1
6	〃	8 住 No. 11	11.9	6.1	4.7	475	砂 岩	砥面 3
7	〃	42 住 床 面	6.1	5.3	2.5	106	凝 灰 質 岩	上下端以外砥面
8	〃	32 住 No. 10	(15.3)	7.3	5.6	(1162)	砂 岩	砥面 2、敲打面 1、片端欠損
9	〃	15 住 上 層	(8.8)	(8.1)	(3.2)	(289)	砂 岩	砥面らしき平滑面 2、周縁欠損
10	敲 石	43 住 No. 38	19.2	9.1	8.9	2143	凝 灰 質 岩	敲打面 1
11	愛 玩 石	33 住 ベルト	10.6	3.5	1.1	60	硬 砂 岩	痕跡皆無
12	〃	8 住 下 層	6.8	2.4	1.2	25	輝 緑 凝 灰 岩	痕跡皆無
13	打 製 石 器	A 区検出面	(6.2)	4.4	(1.6)	(54)	砂 岩	石斧、刃部磨耗激し、片端欠損
14	〃	5 住 中 層	(3.5)	(4.9)	(0.8)	(20)	粘 板 岩	石斧、片端欠損
15	〃	9 住 上 層	(6.5)	9.6	(1.8)	(116)	頁 岩 (変 成 岩)	横刃か？刃部磨耗、片端欠損

金属製品

鉄製品が3種6点、鉄滓2点、銅製品1点が出土している。鉄製品は全て96住から、銅製品はCトレンチからの出土である。以下、種類毎にみていく。

刀子（1～4） 1は片側を破損しているが、残存長5.0cm、幅1.1cmを計る身の一部で、先端部は折り曲げられている。2・3は両側を破損しているが、身から基部の一部である。いずれも棟側は斜めに短く立ち上がる関が認められる。2は残存長4.0cm、幅1.0cmを計り、1と同一個体の可能性がある。3は残存長5.0cm、幅1.0cmを計る。4は基部で、完存していないが残存長7.8cm、幅1.3cmを計ることから、大形の刀子であったと推定される。

紡錘車（5） 同一個体と考えられる輪部と軸部が出土している。輪部は約 $\frac{1}{3}$ を破損しているが、直径4.3cm、最大厚さ0.2cmを計る。軸部が0.6cm残存しており、上・下面とも軸孔周辺は下側に外湾している。軸部は接合しない3片（5.0cm・2.5cm・1.5cm）からなり、いずれも断面は円形である。

斧引鉄（6） 刃部先端を僅かに欠くだけのほぼ完形品で、幅10.5cm、高さ4.1cmあり、刃部は刃幅1.5cm、棟側で厚さ0.3cmを計る。突起部のごく一部に柄の木質部が観察される。

鉄滓 塊状の鉄滓が2点出土しており、それぞれ98.9g・63.4gを計る。

不明銅製品（7） 飾金具の一種と推定される。全形はうかがえないが装飾された輪郭をもつ底板と、横棒を通すためと推定される軸受けからなる。用途・器種共に不明であるが、馬具の可能性も考えられる。（関沢）

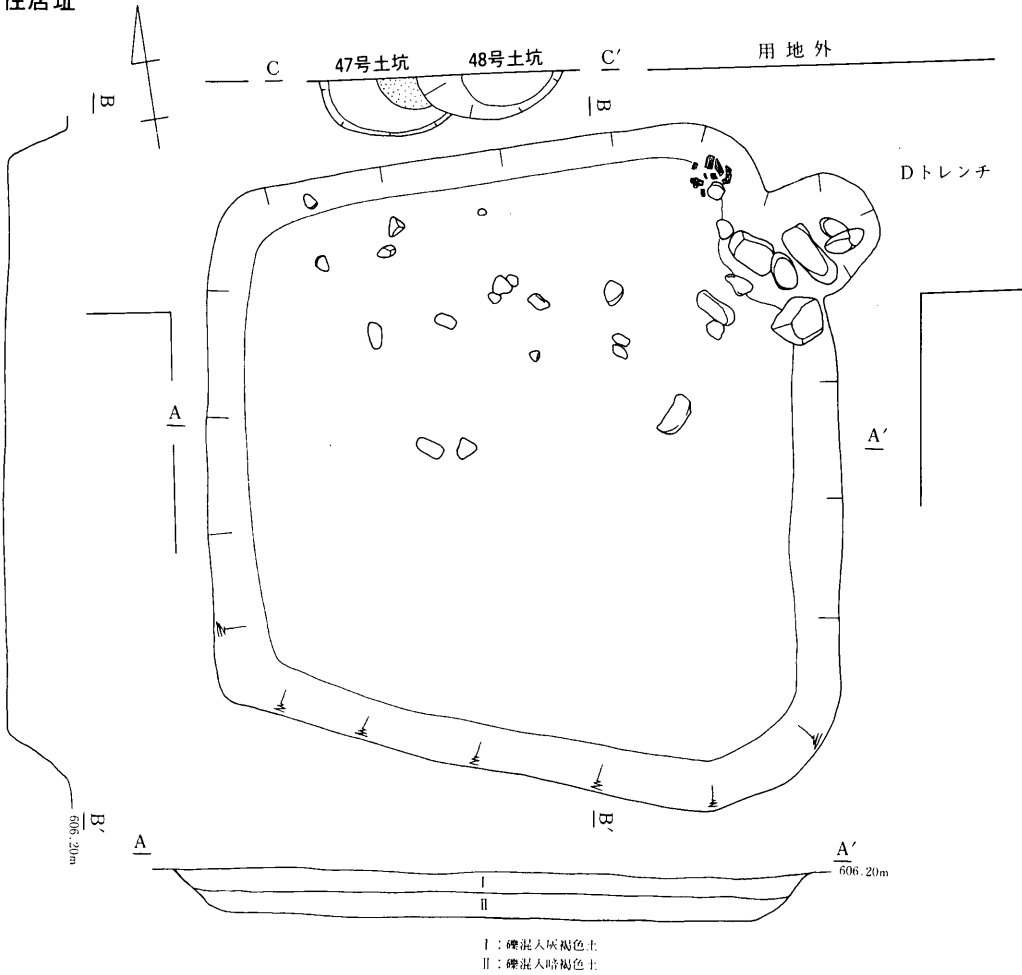
4. まとめ

調査対象地は3150㎡のゲートボール場用地である。ここは平成4年の第1次調査地の隣接地であり、当時確認された平安時代の集落が、ここへどのように関わっているのかを探る事に主眼を置いた。その為、幅の狭い長いトレンチ掘りの方法を取り、実質調査面積は190㎡である。

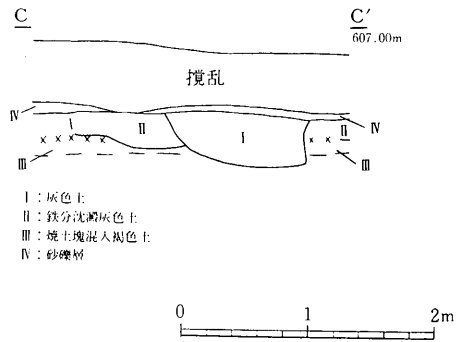
成果は、平安時代後期と時期不詳の住居址各1軒、土坑5基、ピット3基であった。この数は第1次調査の住居址94軒、土坑43基、ピット328基には比べようもない訳であるが、新しい事実も示している。それは平安時代前期を中心に12期までしかなかった1次調査に加え、今回更に新しい13期の住居址が見つかった事である。又、トレンチで検出した土坑は、或いは住居址である可能性も残している。

これらのことは、1次調査地からこの北東の低い側へ、平安時代前期、中期、後期と徐々に新しくなりながらも少し遺構密度は疎となって、集落は存続し得てきていると思われることである。

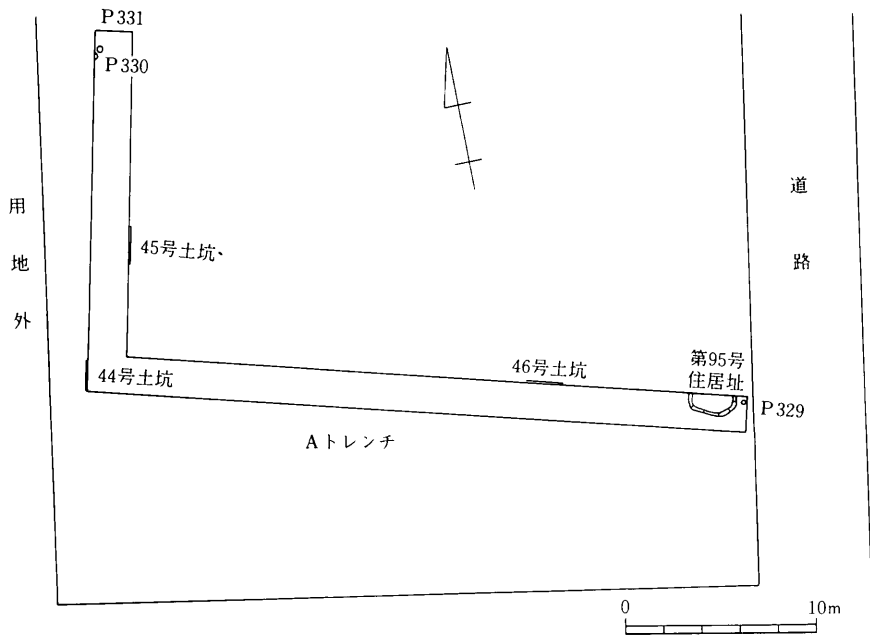
第96号住居址



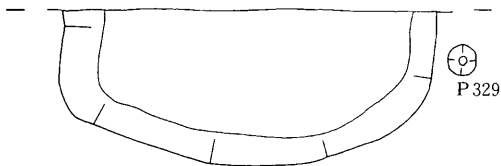
47・48号土坑



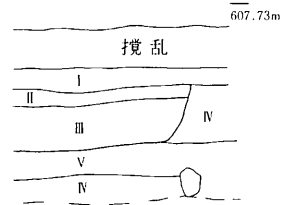
遺構 1



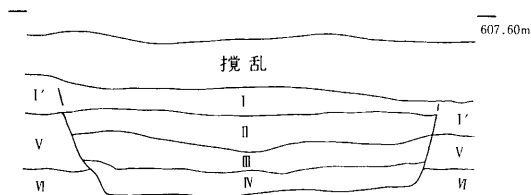
第95号住居址



44号土坑

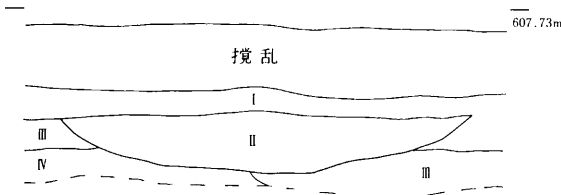


- I : 鉄分多量沈澱砂質灰色土
- II : 小・中礫混入褐色土
- III : 小・中礫混入暗褐色土
- IV : 砂礫層
- V : 砂質褐色土



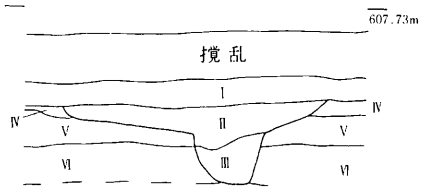
- I : 灰褐色土
- I' : 鉄分多量沈澱砂質灰色土
- II : 小・中礫混入褐色土(鉄分沈澱)
- III : 砂礫混入暗褐色土
- IV : 砂礫多量混入暗褐色土
- V : 砂礫層
- VI : 灰色砂層

46号土坑

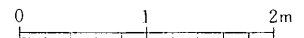


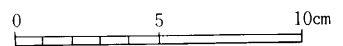
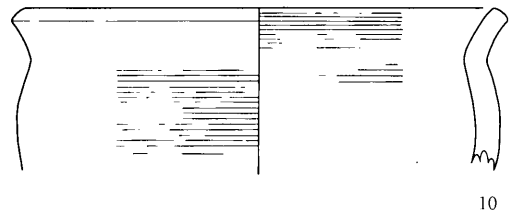
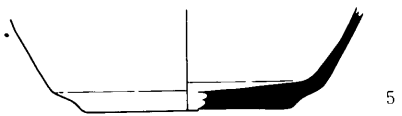
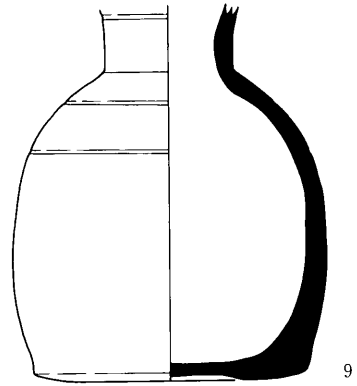
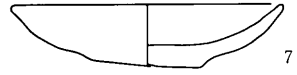
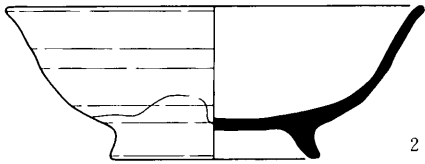
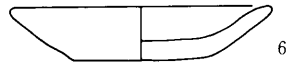
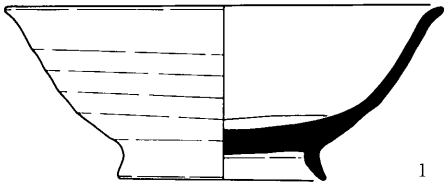
- I : 鉄分多量沈澱砂質灰色土
- II : 中礫少量混入黒褐色土
- III : 砂礫層
- IV : 灰色砂層

45号土坑



- I : 鉄分沈澱砂質灰色土
- II : 小・中礫混入褐色土
- III : 小・中礫混入暗褐色土
- IV : 鉄分多量沈澱砂質灰色土
- V : 鉄分多量沈澱砂礫層
- VI : 砂質褐色土

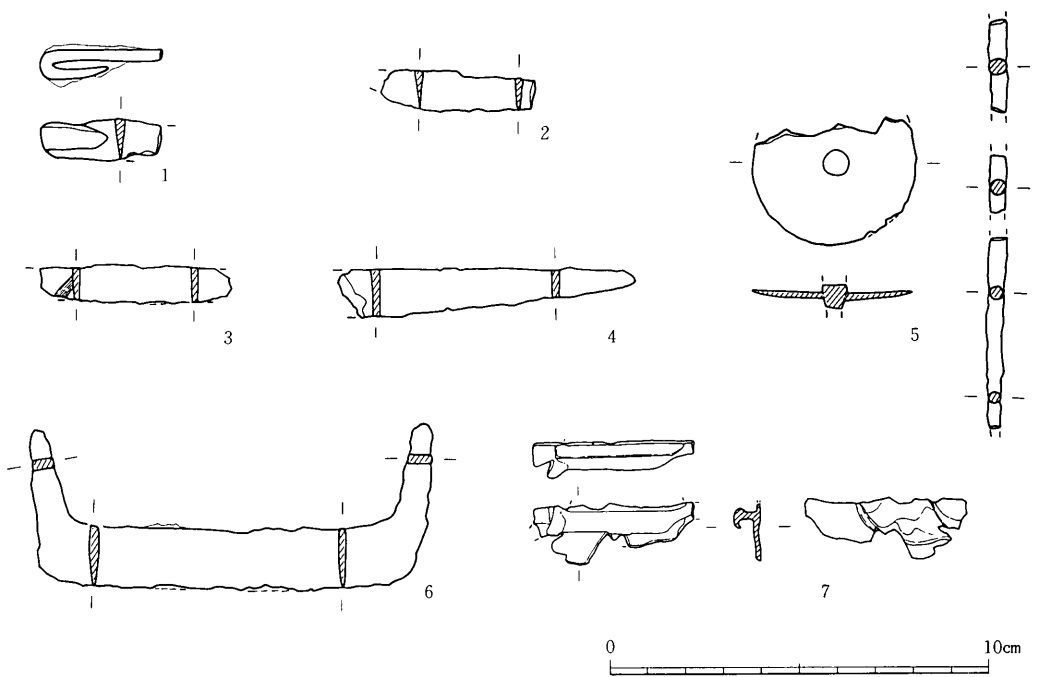
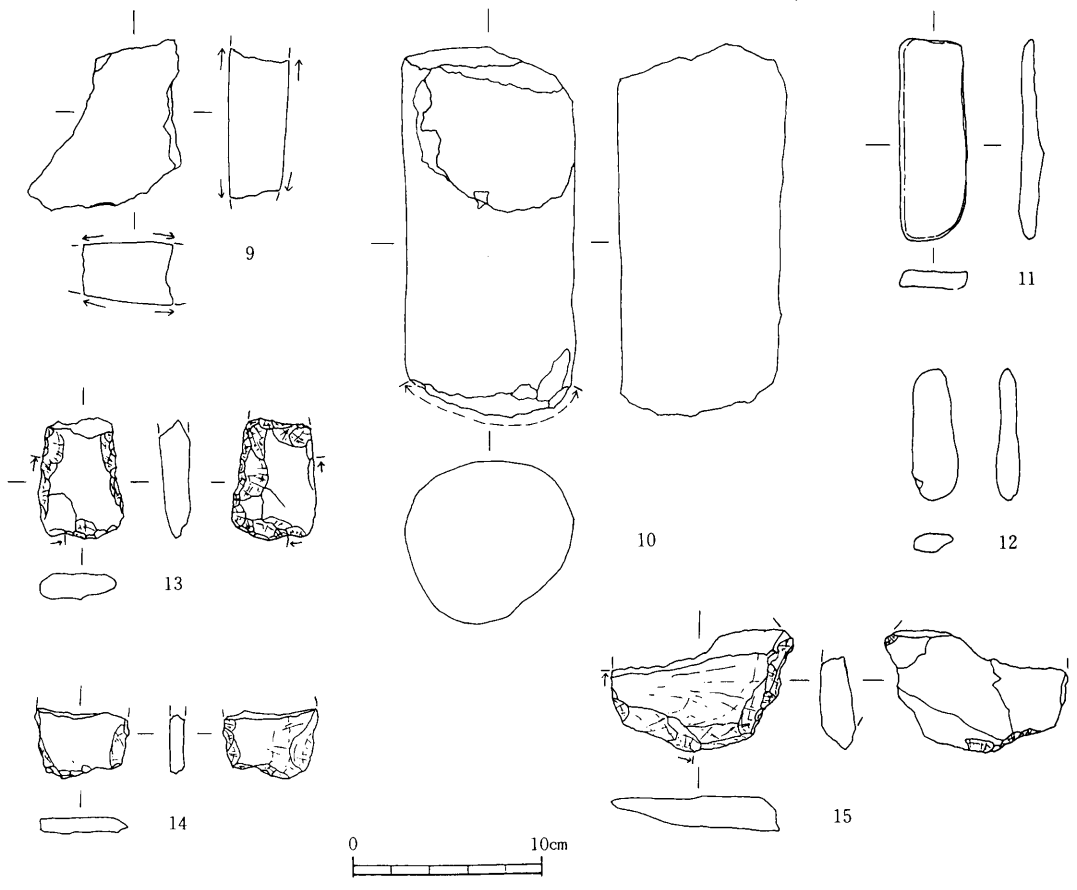




遺物 1



遺物 2



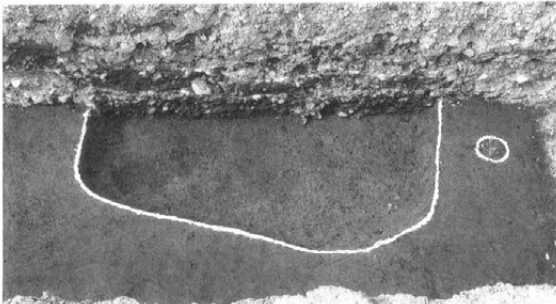
遺物 3



Bトレンチ (東から)



Cトレンチ (南西から)



第95号住居址・ P 329



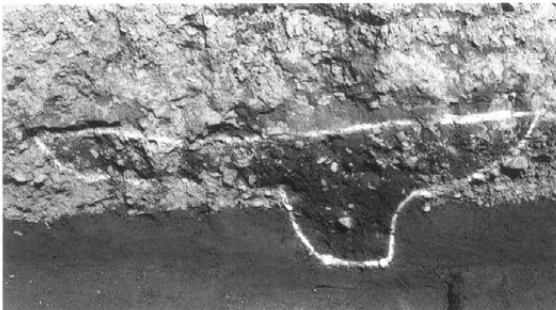
Dトレンチ (西から)



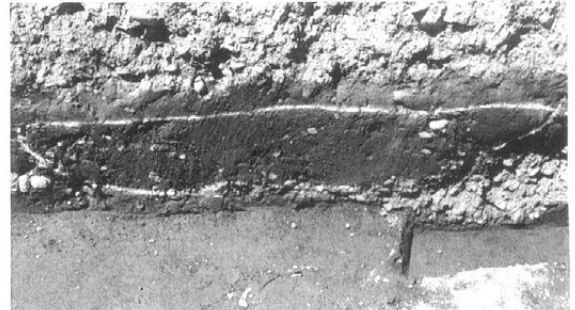
第96号住居址 (南西から)



同カマド



45号土坑



46号土坑



図 版 2

平田本郷遺跡Ⅱ発掘調査報告書抄録

ふりがな	まつもとしひらたほんごういせきⅡきんきゆうはくつちようさほうこくしよ							
書名	松本市平田本郷遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.119							
編著者名	高桑俊雄・関沢 聡・竹内靖長・三村竜一							
編集機関	長野県松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390 長野県松本市中山3738-1 TEL. 0263-86-4710							
発行年月日	平成7(1995)年3月22日（平成6年度）							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平田本郷	長野県松本市	20202	293	36度 11分 30秒	137度 57分 45秒	940510 ～ 940524	190	公園緑地 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平田本郷	集落跡	平安	竪穴住居址	2軒	土器：土師、須恵			
			土坑	5基	陶器：灰釉			
			ピット	3基	金属製品：刀子、紡錘車 苧引鉄			

松本市文化財調査報告 No.119

平 田 本 郷 遺 跡 Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

平成7年3月22日 印刷

平成7年3月22日 発行

編集 長野県松本市教育委員会
(松本市立考古博物館)

〒390 長野県松本市中山3738-1

TEL 0263-86-4710

発行 長野県松本市教育委員会

印刷 精美堂印刷株式会社
